

博多 175

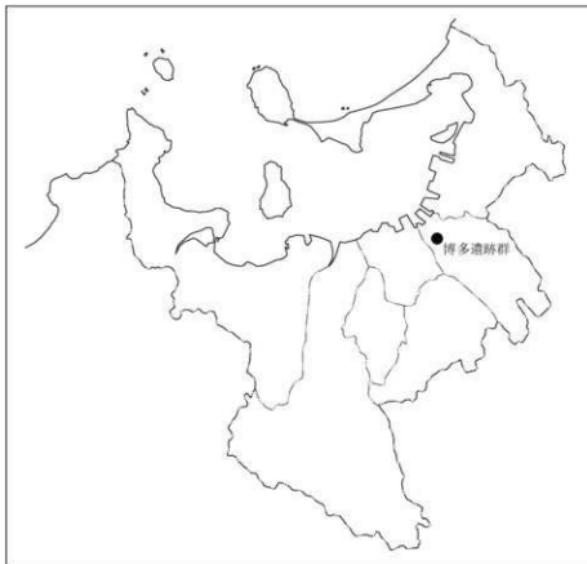
—博多遺跡群第227次調査報告—

2021

福岡市教育委員会

博多 175

—博多遺跡群第227次調査報告—



遺跡略号 HKT227
調査番号 1904

2021
福岡市教育委員会

序

福岡市は、古来、大陸文化の門戸としての役割を担い発展してきた歴史をもち、地中には多くの文化財が分布しています。本市では、これら文化財の保護につとめているところではあります
が、各種の開発事業によってやむを得ず失われる文化財に対しては、発掘調査を行い、記録保存を行ふことで後世に残しています。

本書は、博多区中呉服町に所在する博多遺跡群の第 227 次調査の報告書です。対象地は文献資料にも残る息浜の南端部に位置しており、一帯が都市として栄え始めた時期の遺構、遺物を検出しました。

本調査の成果が文化財保護への認識と理解を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にあたってご理解とご協力をいただきました事業主をはじめとして関係者の皆様、心から感謝の意を表します。

令和 3 年 3 月 25 日

福岡市教育委員会
教育長 星子 明夫

例言

1. 本書は、福岡市教育委員会が令和元年 5 月 8 日から 5 月 13 日まで博多区中呉服町で実施した博多遺跡群第 227 次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺構は、井戸を SE、土坑を SK、柱穴状遺構を SP とそれぞれ記号化し、01 から通して番号を付した。
3. 本書で使用した方位は、すべて国土地理院（世界測地系）である。
4. 本書に掲載した遺構実測は田上勇一郎、中尾祐太による。
5. 本書に掲載した遺構写真撮影は田上による。
6. 本書に掲載した遺物実測、製図は中尾による。
7. 本書の執筆は中尾が行い、編集は田上の補助を得て中尾が行った。
8. 本書に係る記録と遺物は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、管理・活用する。

調査番号	1904	遺跡略号	HKT227
調査地	博多区中呉服町 56	分布地図図幅名	48 千代博多
申請面積	97.2m ²	開発面積	77.35m ²
調査実施面積	82m ²	事前審査番号	30-2-651
調査期間	2019.5.8 ~ 2019.5.13		

本文目次

I	はじめに	1
1.	調査にいたる経緯	1
2.	調査の組織	1
3.	遺跡の立地と歴史的環境	2
II	調査の記録	6
1.	調査の概要	6
2.	遺構と遺物	8
(1)	井戸	8
(2)	土坑	10
(3)	その他の出土遺物	14
III	小結	14

挿図目次

Fig1	周辺遺跡分布図 (1/50,000)	3
Fig2	博多遺跡群各調査地点位置図 (1/6,000)	4
Fig3	博多遺跡群消長表	5
Fig4	227 次調査地点位置図 (1/1,000)	5
Fig5	227 次調査遺構配置図 (1/100)	7
Fig6	SE01・02 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	9
Fig7	SK03 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	10
Fig8	SK04・15・16 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	11
Fig9	SK05・07・08・10 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	12
Fig10	SK11 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	13
Fig11	その他の出土遺物実測図 (1/3) (1/2)	14

写真目次

Ph1	調査区全景 (南東から)	6
Ph2	SE01・02 土層断面 (南西から)	8
Ph3	SK05 遺物出土状況 (南西から)	12
Ph4	SK08・10 完掘状況 (南から)	12

I はじめに

1. 調査にいたる経緯

福岡市教育委員会は、同市博多区中呉服町 56 番における事務所建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成 30 年 10 月 10 日付で受理した。

これを受け埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡群に含まれていること、土留め工事の立合を行い、現地表面下 200cm で遺構が確認されたことから、遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。

その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、事務所建設部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、平成 31 年 4 月 1 日付で株式会社千客万来不動産を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同令和元年 5 月 8 日から発掘調査を、令和 2 年度に資料整理および報告書作成を行うこととなった。

2. 調査の組織

調査委託：株式会社千客万来不動産

調査主体：福岡市教育委員会（発掘調査：平成 31 年度（令和元年度）・資料整理：令和 2 年度）

調査総括：文化財活用部埋蔵文化財課

課長 菅波 正人

調査庶務：文化財活用課

課長 松本 真人

同課管理調整係長 藤 克己（H31・R1 年度）

大森 秋子（R2 年度）

同係 松原加奈枝

事前審査：埋蔵文化財課事前審査係

係長 本田浩二郎

同課主任文化財主事 田上勇一郎

同係文化財主事 朝岡 俊也（H31・R1 年度）

山本 晃平（R2 年度）

調査担当：埋蔵文化財課事前審査係

主任文化財主事 田上勇一郎

文化財主事 中尾 祐太

3. 遺跡の立地と歴史的環境

博多湾沿岸部に位置する博多遺跡群は砂丘を基盤とする遺跡である。本砂丘は「箱崎砂層」と呼称される新砂丘砂層で（下山 1989）、分布範囲は福岡市の市域とほぼ重複する。遅くとも纏文時代晚期には砂丘のかなりの部分が形成されていたことが明らかになっており（下山 1998）、砂丘上には多数の遺跡が存在する。砂丘はその形成の過程で列状に堆積していることが明らかとなっており、博多遺跡群付近は3つの砂丘列（内陸側から砂丘I・砂丘II・砂丘III）で構成されている（磯・下山・大庭・池崎・小林・佐伯 1998）。最も北に位置する砂丘3は文献資料から「息浜」と呼称されており、これに対する内陸側の二列を便宜的に「博多浜」と仮称している。

博多遺跡群においてはじめて遺構が検出されるのは、弥生時代前期であるが、まずは最も内陸に位置する砂丘1において認められる。その後、時期が下ると集落的な様相が強くなるとともに、遺構の検出範囲が砂丘2へと拡大する。弥生時代終末期～古墳時代前期にかけては畿内系や山陰系、東海系などの他地域の土器が複数確認されており、早くも立地的な環境をいかした対外交流の拠点としての側面がうかがえる。博多浜には前方後円墳も築かれ、いわゆる博多一号墳と呼称される古墳は、近年調査された198次調査でもその一部が確認されている。

奈良時代になると博多浜の全城で遺構がみられるようになる。また、積極的な土地利用とはいえないが、息浜にも人跡が進出した跡がうかがえる。遺構の増加に直接的に関係するのは正方位をとる溝から推定される官衙城の存在であろう（池崎 1988）。この官衙は文献資料からその存在を確認することはできず、詳細は全く不明であるといわざるを得ない。しかし、帶金具や官職を示す「長官」「佐」を記した墨書須恵器、皇朝十二錢が周辺を中心に出土することから、その存在はほぼ確実といつても過言ではない。また、継続的な調査、およびそれらの蓄積から、官衙城周辺には「集落城」、「港湾城」と仮称される別の区画があった可能性が想定されており（本田編 2010など）、これらの各区画からも、官衙城同様の官人階級関連遺物が一定のまとまりをもって出土している。これらの遺構群は、立地的・環境的側面からみても、鴻臚館との関連は少なからずあったものと考えられ、これを補完する役割を担っていたのだろう。

鴻臚館からは11世紀中頃以降の遺構・遺物がほとんど検出されていないが、該期以降、文献資料にもその名がみられなくなる。最後に記述された『扶桑略記』には放火されたことが記されており、焼失後放棄されたと推定されている。この時期を前後して、博多遺跡群では遺構・遺物が急増することから、貿易の拠点が鴻臚館から博多に移ったと理解されているが、博多湾沿岸における拠点の円滑な移動の背景には、上記のような立地環境を含めた古代以来の関係性があったのだろう。

博多遺跡群における貿易の拠点性は他を凌駕する貿易陶磁器の量や、これに墨書きされた中国人名、「綱（首）」に如実に表れている。また、中国の貿易商人は「博多津唐房」を形成し、これを拠点として貿易を行っていたと考えられる。拠点は遺構の分布状況から当初は港に近い博多浜の西側一帯に形成されていたと推定されている。

なお、12世紀初頭になると、埋め立てにより博多浜と息浜は陸続きになったことが明らかになっている。上記のとおり遺跡の中心は博多浜であるが、息浜では陸続きになって間もなく道路が整備される（165次・204次）。本道路は後に遺跡全体にかけて整備される道路に先行するが、古代の博多浜でみられるどの町割りにも系譜をもたず、かつてのうちに博多浜で整備される道路とも異なる軸をもち、砂丘の尾根線に規制されたものと考えられる。

13世紀後半の蒙古襲来を画期として、都市博多のありかたは著しく変容する。1274年の「文永の役」

後、博多湾沿岸に設置された元寇防壁は、博多遺跡群でも 111 次などで確認されている。防壁が築かれてからは、息浜の都市化が一層顕著になるとされており、一帯における遺構の検出割合は前代と比して著しく増加する。このころになると、博多港西側にあった從来の港は機能を失い、息浜に移動したと考えられている。

本書で報告する 227 次調査地点は息浜の南側に位置するが、息浜と博多港が陸続きになり、息浜での遺構が増加し始める 12 世紀前半の遺構を 1 基検出しており、息浜の都市化が進む 13 世紀後半前後の遺構はまとめて確認されている。

参考文献

- 池崎 譲二 1988 「町割りの変遷」『よみがえる中世 1—東アジアの国際都市 博多』 平凡社
磯望・下山正一・大庭康時・池崎謙二・小林茂・佐伯弘次 1998 「博多遺跡群をめぐる環境変化—弥生時代から近代まで』『福岡平野の古環境と遺跡立地—環境としての遺跡との共存のために』九州大学出版会
下山正一 1989 「福岡平野における縄文海進の規模と第四紀層」『九州大学理学部研究報告（地質）』16-1
下山正一 1998 「福岡平野の縄文海進と第四紀層」『福岡平野の古環境と遺跡立地—環境としての遺跡との共存のために』九州大学出版会
本田浩二郎編 2010 「博多 135—博多遺跡群第 172 次調査報告」市報第 1086 集

表 (Fig3) の出典

中尾祐太 2019 「博多の最新発掘調査状況」『港津と権力』山川出版社

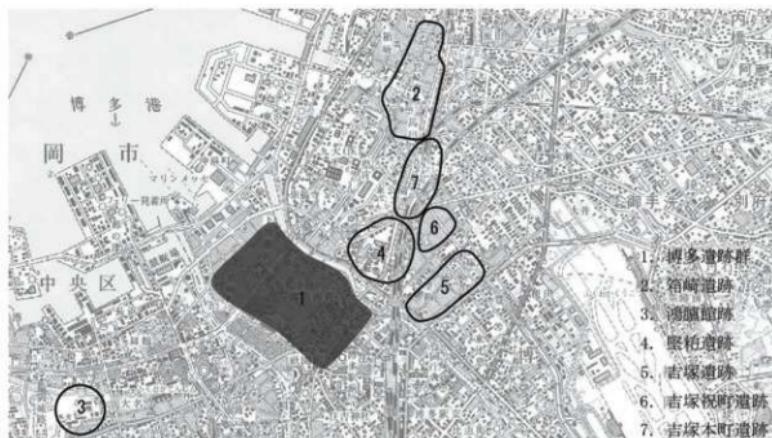


Fig1 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

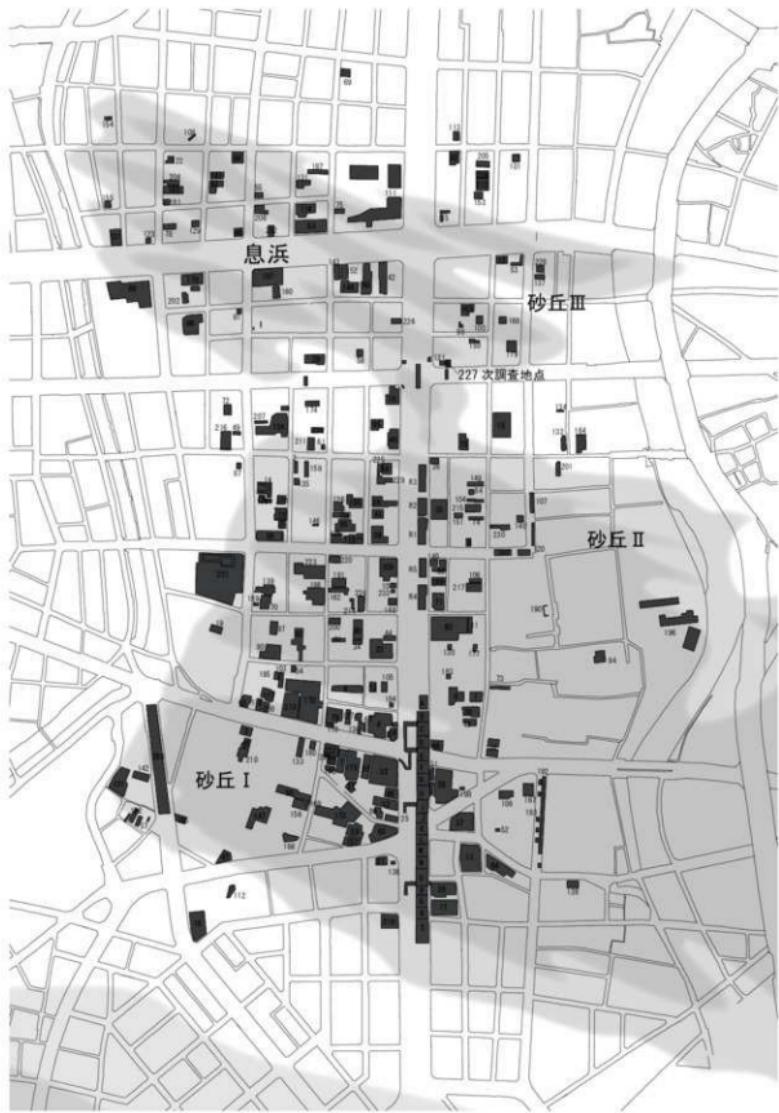


Fig2 博多遺跡群各調査地点位置図 (1/6,000)

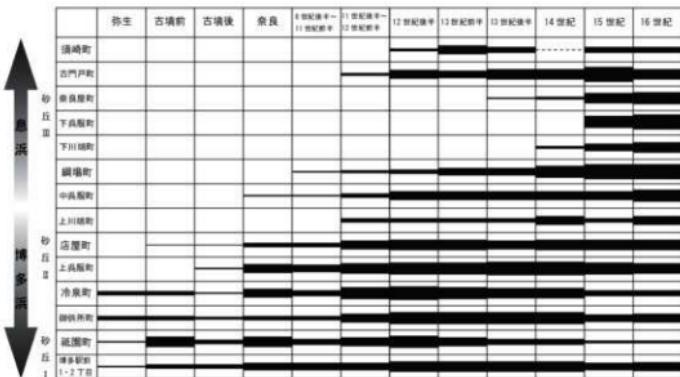
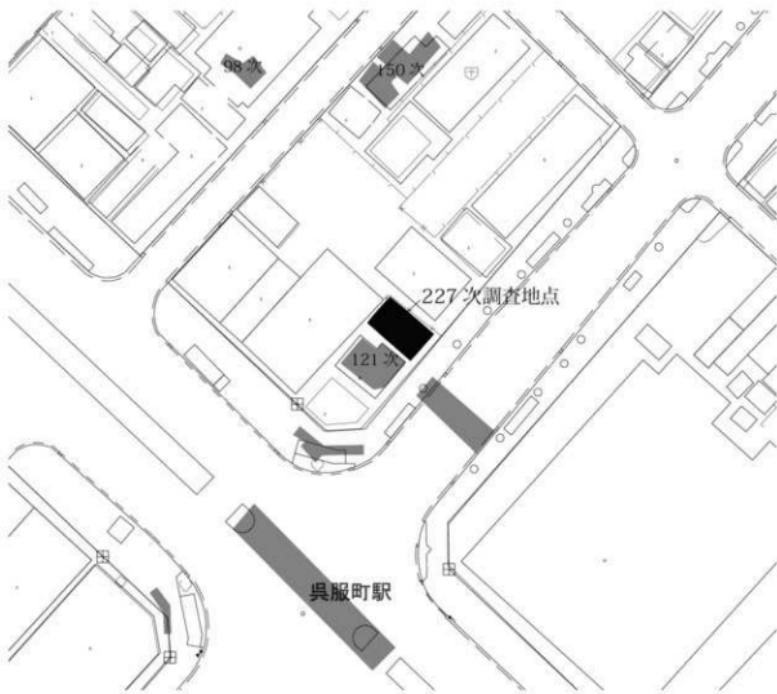


Fig3 博多遺跡群消長表



II 調査の記録

1. 調査の概要

227 次調査地点は、遺跡の中央やや北寄りに位置する。旧地形をみれば、息浜（砂丘III）の南端部に立地していることが分かる。周辺では複数の調査が実施されているが、西側隣地には 121 次調査地点が、北東には 157 次調査地点が所在する。

本調査は敷地面積 97.2 m²のうち、事務所建設によって影響が及ぶ範囲で実施した。調査面積は 82 m²である。

確認調査の結果によると、遺構は GL-200 cm で検出された砂丘面上でのみ確認されており、その上面の包含層および遺構面は旧建物の建築、解体等によって失われていた。よって、調査は 1 面を対象として行った。

調査に先立って、4月 23 日から事業主の協力のもと表土の鏟取りを行った。鏟取り時には立ち合い、遺物の採取に努め、同時に遺構検出を行った。鏟取りは 24 日に終了し、5月 8 日から調査を開始した。敷地のほとんどが調査地になっていたため、調査区内の搅乱を廃土置き場とし、反転をせず調査を行った。検出遺構は井戸と土坑で、順次、遺構検出、精査、掘削、記録を行い、調査は同月 13 日に終了、同日に機材等の搬出を行い、発掘調査にかかる全作業を終了した。



Ph1 調査区全景（南東から）



Fig5 227次調査遺構配置図 (1/100)

2. 遺構と遺物

(1) 井戸

井戸は2基検出した。

SE01・02 (Fig6・Ph2)

調査区内の中央東寄りで検出した。同一地点で切り合っており、SE01がSE02を切る。検出当初はSE02の堀方の残存部がわずかであったことから、これを土坑としていたが、土層観察の結果、SE01のものとは異なる井筒の立ち上がりを確認し、井戸であることが明らかになった。

SE01の堀方は径約270cmの不正円形を呈しており、断面形は底面にかけて碗形に窄まる。残存する深さは約140cmである。井筒の径は約65cm。覆土はやや粘性のある黒色砂を基本とする単一層で、覆土中には炭化物を含む。底面付近で結構の痕跡と考えられる木質を確認した。

SE02の堀方は部分的しか残存しておらず、全容不明。井筒は径約70cmを測る。SE01同様、底面で木質を確認しており、桶組の井戸と考えられる。

以下の出土遺物から両遺構の時期は13世紀後半～14世紀前半後と考えられる。

1～16はSE01出土遺物。1～11は堀方出土。1は中国陶器壺である。底部～胴下半が残存する。2～4は白磁皿IX類である。5～9は龍泉窯系青磁。5はII類、6～9はIII類である。5～7は碗。5・6は外面に蓮弁文を有する。7は底部片。高台疊付部分の軸を割りとり周囲の露胎部は赤く発色する。8は小碗である。9は壺の口縁片。口縁端部の軸が厚く丸い玉縁を呈する。10は土師器小皿。底部糸切りで、器高1.8cm、復元口径8.2cm、復元底径6.6cmを測る。11は須恵質の碗である。底部は厚く、十瓶山窯の円盤状高台に似る。12～17は井筒出土。12～15は土師器小皿である。底部の切り離し



Ph2 SE01・02 土層断面（南西から）

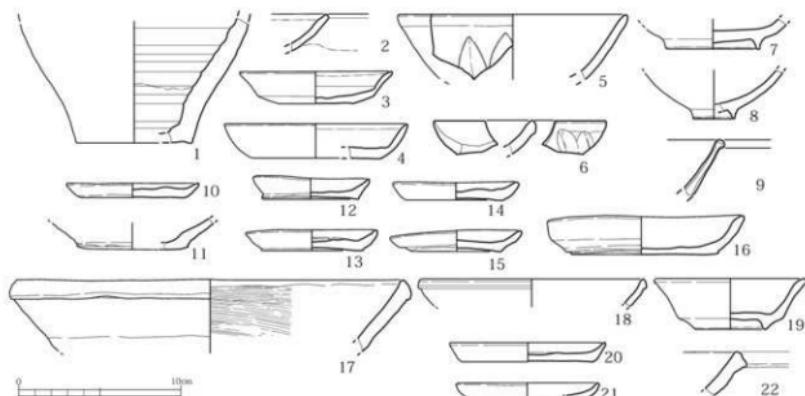
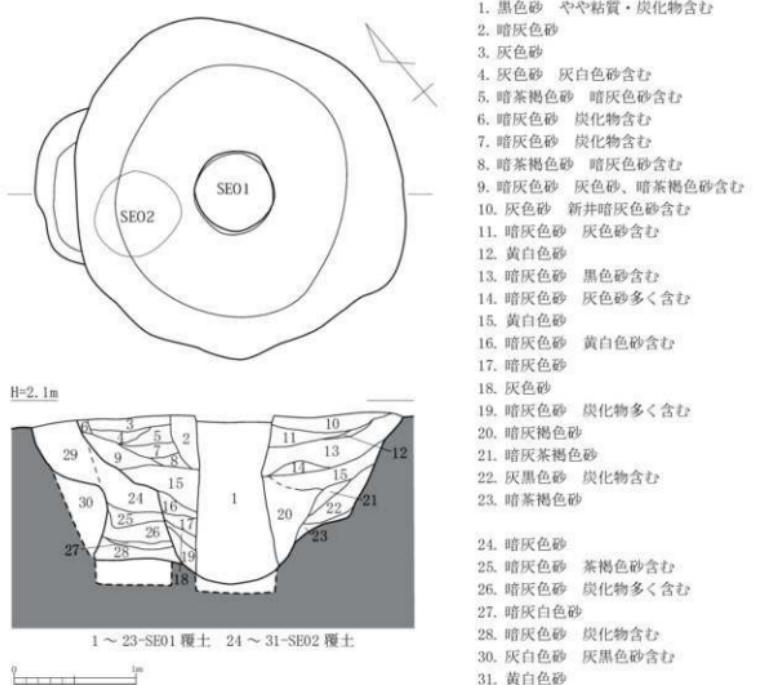


Fig6 SE01・02 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

はいずれも糸切りによる。器高は0.9cm～1.4cm、口径は7cm～8cm、底径は5.5cm～6.3cmでそれぞれの平均値は器高1.8cm、口径7.6cm、底径5.9cmである。16は土師器壺である。底部糸切りで、器高2.4cm、口径11.9cm、底径9.1cmを測る。17は瓦質の捏鉢である。

18～22はSE02出土遺物である。18～20は当初土坑として取り上げたものであるが、堀方に該当すると考えられる。18は白磁碗II類である。19は龍泉窯系青磁壺である。高台の軸を削り取っており、露胎部との境は赤く発色する。20は土師器小皿である。底部糸切りで、器高1.2cm、復元口径9.4cm、復元底径は8.1cmを測る。21・22は井筒出土。21は土師器小皿である。底部糸切りで、器高1cm、口径8.6cm、底径7.3cmを測る。22は瓦質鉢の口縁片。捏鉢だろう。

(2) 土坑

土坑の規模は大小様々で、相対的に小さく、本来ならピットとすべきものもあるが、ここでは調査時に採番した遺構番号のとおりに報告する。

SK03 (Fig7)

調査区の北端部で検出した。SK11を切り、調査区外へ延びる不明遺構と擾乱に北東部の一部を切られる。残存部も不良だが、残存部から楕円形を呈するものと考えられる。深さは最深部で約65cmを測る。出土遺物は少ないが、下っても12世紀前半代に収まると考えられる。

23は白磁碗V類である。24は黒色土器A類の碗である。25は瓦器碗である。内外面ともにミガキが雜で器壁に凹凸が残る。26は瓦器壺である。口縁部下は強いヨコナデにより沈線状の段がつく。27・28は楠葉型瓦器碗である。両者とも内外面に丁寧なミガキを施し、口縁部には沈線をもつ。I期に属するものだろう。

SK04・15・16 (Fig8)

調査区中央北寄りで検出した。近い場所で3基が切り合っており、まとめて報告する。遺構の前後関係は、古いものからSK15→SK16→SK04の順になる。

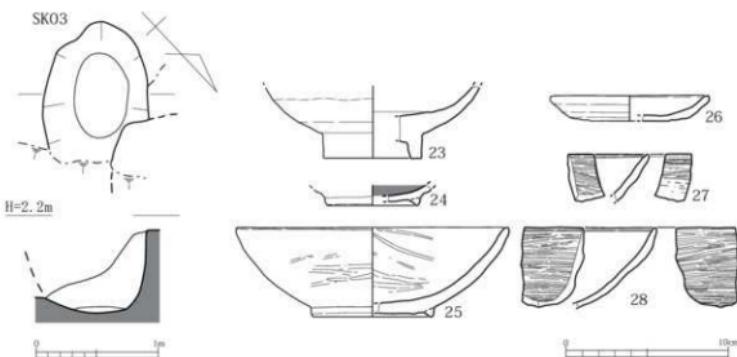
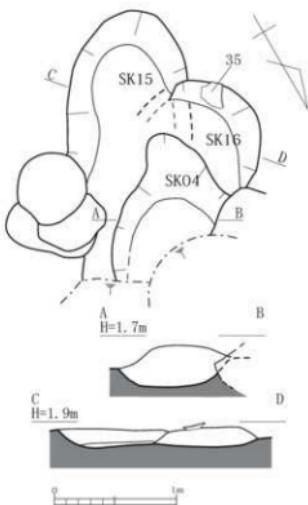
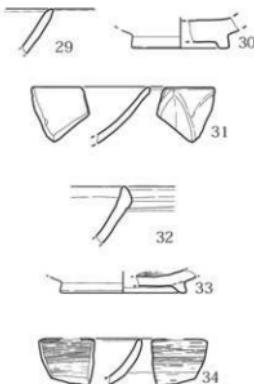


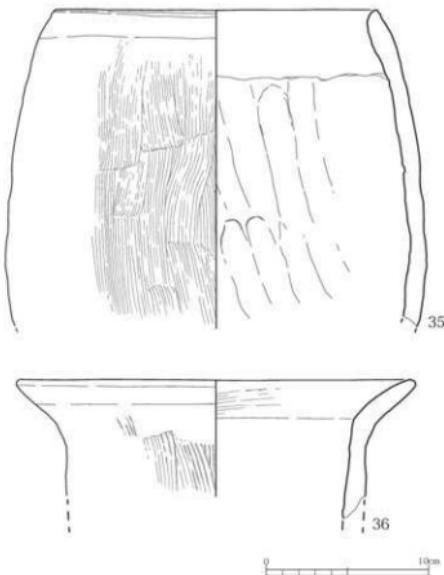
Fig7 SK03 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)



SK04 出土遺物



SK16 出土遺物



図化し得たのは SK04 と SK16 出土遺物のみである。

29 ~ 34 は SK04 出土遺物である。29 は白磁 IX 類。皿と考えられる。30・31 は龍泉窯系青磁碗である。30 は I 類の底部片である。31 は II 類の口縁片。32 は東播系須恵器の口縁片である。33 は瓦器碗の底部片である。34 は楠葉型瓦器の口縁片。残存部はわずかだが、碗と考えられる。内外面とも比較的丁寧なミガキを施しており、口縁部には沈線をもつ。1 期に属するものと考えられる。

35・36 は SK16 出土遺物である。35 は長胴でやや内側に窄まりながら立ち上がる器形の土師質土器。煮炊具と考えられ、ここでは甕と報告する。外面タテハケ、内面ケズリ仕上げで、内外面ともに丁寧で規則的な調整が施される。36 は甕である。

Fig8 SK04・15・16 実測図 (1/40)

および出土遺物実測図 (1/3)

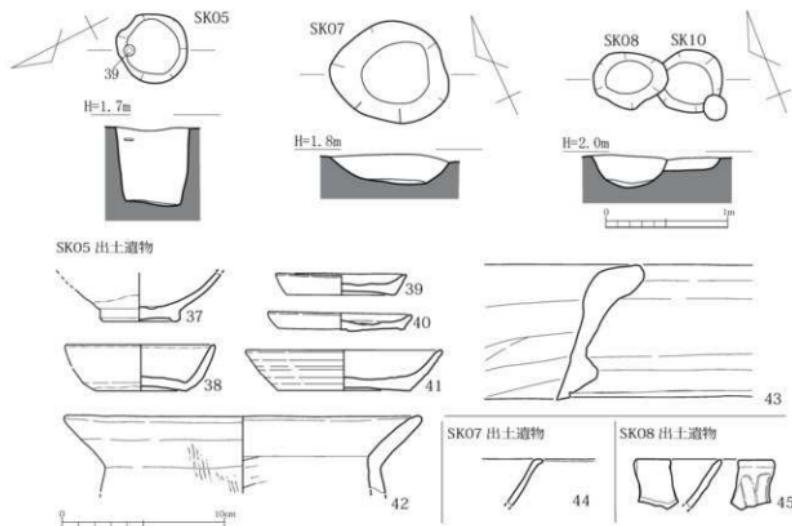


Fig9 SK05・07・08・10 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

SK05 (Fig9・Ph3)

調査区中央北寄りで検出した。径約50cmの円形を呈し。壁面の立ち上がりは直で深さは約60cm残存する。本遺構出土遺物は二次的に被熱したものが多い。以下の出土遺物から13世紀後半～14世紀前半前後の遺構と考えられる。

37は白磁碗IX類である。内面見込み部分には圓線をもち、底部の中心付近が膨らむ。38は白磁皿IX類である。39・40は土師器小皿である。いずれも底部糸切りで、器高・口径・底径は39が1.3cm・8cm・6.5cm、40が1.25cm・8.6cm・7.6cm。41は土師器壺である。底部糸切りで、器高2.5cm、復元口径11.9cm、復元底径8.05cmを測る。42は土師器甕である。43は移動式竈。類例は180次調査で出土している。180次調査の資料をみると、通常は上部が内傾しながら立ち上がるのに対し、上開口部が据径より広く成形されており、径は内径でも約50cmを測り、通常の甕を据えるものではない。180次調査の所見では鉄鍋(中華鍋)を対象とした製品と推定されている。



Ph3 SK05 遺物出土状況（南西から）



Ph4 SK08・10 完掘状況（南から）

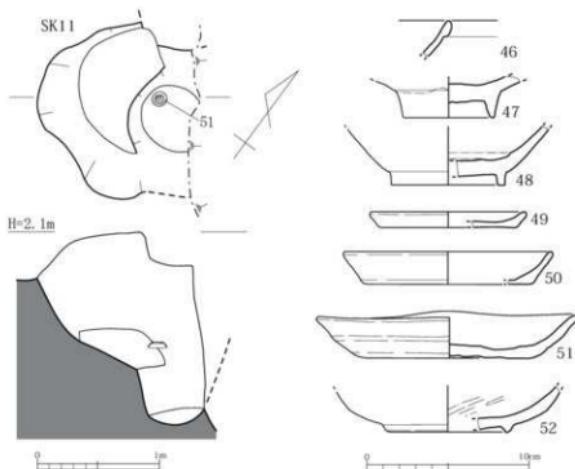


Fig10 SK11 実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

SK07 (Fig9)

調査区中央南西寄りで検出した平面不正円形の土坑である。立ち上がりは緩やかで、深さは約 25 cm 残存する。出土遺物は少なく時期は不明。

44 は白磁碗 V 類の口縁片である。

SK08・10 (Fig9・Ph4)

調査区南東部で検出した。SK08 は短軸約 45 cm、長軸約 60 cm の楕円形の土坑で、断面は半円形を呈する。深さは約 25 cm 残存する。これに切られる SK10 は径約 50 cm の円形を呈する。床面は平坦で深さ約 10 cm 残存する。図化し得たのは SK08 出土遺物 1 点のみで時期は不明。

45 は中国産青磁の口縁片である。

SK11 (Fig10)

調査区北端部で検出した。SK03 に切れられ、かつ遺構の北側は調査区北側に延びる不明遺構及び擾乱に切られる。平面は不整形で、南西側に緩やかな段を有する。中層で 51 が出土した。以下の出土遺物から 12 世紀後半前後の遺構と考えられる。

46～48 は白磁碗である。46 は II 類の口縁片。47 は V 類の底部片。48 は VII 類の底部片。49 は土師器小皿である。底部糸切りで、器高 1.0 cm、復元口径 9.2 cm、復元底径 8.2 cm を測る。50・51 は土師器環である。50 は底部の残存部がわずかで、切り離し法は不明。器高 2.05 cm、復元口径 12.8 cm、復元底径 10.2 cm を測る。51 は底部糸切りで、器高は歪みによる差があり、2.5 cm～2.9 cm で、口径 16 cm、底径 10.2 cm を測る。52 は瓦器碗である。

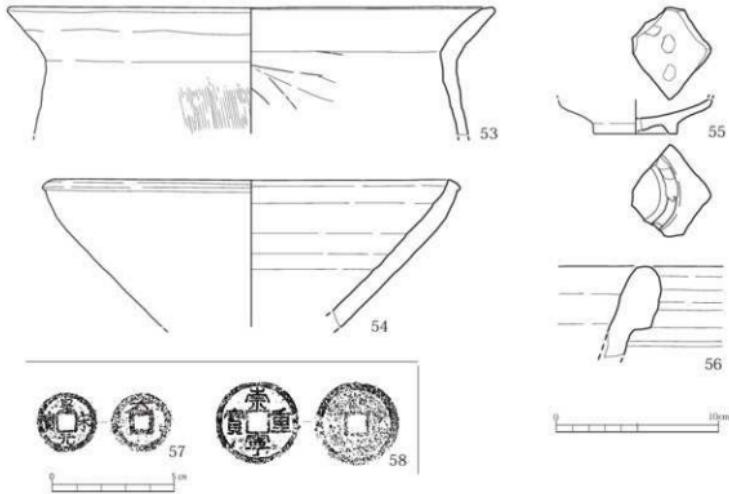


Fig11 その他の出土遺物実測図 (1/3) (1/2)

(3) その他の出土遺物

ここでは上記の遺構以外で出土した遺物をまとめて報告する。53は遺構検出時に出土した土師器壺である。54～56は鋤取り立会い時に採取した遺物である。54は東播系須恵器の捏鉢である。体部の立ち上がりは漏斗状を呈し、口縁端部がわずかに外側に張り出す。55は朝鮮王朝白磁。体部下半が残るが中位で上方に向かって強く屈曲し立ち上がる器形である。56は備前焼の壺口縁部である。57、58は銅錢である57は「皇宋元寶」、58は「崇寧重寶」。

III 小結

最後に本調査成果を既往の調査結果と比較しながらまとめたい。本調査は砂丘面上の1面を対象として調査を行っており、検出した遺構は当該地における古い段階のものが多くを占めていると考えられる。最も古い時期に位置づけられるのはSK03で12世紀前半を下限とする遺構と考えられる。この時期は中興服町地内において本格的に遺構が営まれる時期である。12世紀後半以降、同町内では遺構が増加するが、SK11はこの時期に属すると考えられる。本調査地点で検出した遺構のうち最も多いのは、白磁IX類を基準とする13世紀後半～14世紀前半の遺構で、SE01、SE02、SK05が該当する。遺構の絶対数は少ないが、小片のため図化し得なかった遺物をみても、12世紀後半～14世紀代にかけての遺物は比較的万遍なく出土している。また、黒色土器が出土することから、近辺に古代の遺構が少なからず展開することが考えられる。以上の結果はこれまでの調査成果と概ね同様の傾向を示す。

遺物の総数も決して多くはないが、その中で楠葉型瓦器碗が3点出土している。また、SK05出土の移動式竈(43)はこれまでの調査でもほとんど出土していない上部開口部が大きいタイプのものと考えられ、注目に値する。

報告書抄録

ふりがな	はかた 175							
書名	博多 175							
副書名	博多遺跡群第 227 次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	1418 集							
編著者名	中尾祐太							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒 810-8621 福岡市中央区天神 1-8-1 Tel 092-711-4667							
発行年月日	2021 年 3 月 25 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				m ²	
はかた 博多遺跡群第 227 次	ふくおかしはかたなかごふくまち 福岡市博多区中州敷削町 56 番	40132	0121	33 度 35 分 54 秒	130 度 24 度 35 秒	2019.5.8 ~ 2019.5.13	82m ²	事務所
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
博多遺跡群	集落跡	中世	井戸、土坑	中国産陶磁器、土師質 土器、瓦質土器				
要約	<p>博多遺跡群の基盤となる砂丘は三つの列で構成されており、対象地は最も北側の砂丘列上に立地する。この砂丘は文献資料から息浜と呼称されている。当初は内陸に位置する残る二つの砂丘列とは海によって隔られていたが、12世紀には地継続になり、これを境に息浜は都市化する。本調査地点では対象地付近が地継続になった 12 世紀前半の遺構の他、都市化が顕著となる 13 世紀後半～14 世紀前半の遺構を多く検出している。</p>							

博多 175

博多遺跡群第 227 次調査報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1418 集

2021（令和 3）年 3 月 25 日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号

印刷 下川印刷有限会社

福岡市東区八田 17-24-1
